

AIは「ともだち」(?)～人間は何ものなのでしょう

同志社大学名誉教授

越川 弘英

あなたの天を、あなたの指の業を
わたしは仰ぎます。
月も、星も、あなたが配置なさったもの。
そのあなたが御心に留めてくださるとは
人間は何ものなのでしょう。
人の子は何ものなのでしょう
あなたが顧みてくださるとは。
(詩編 8 編 4-5 節)

「チャッピーに聞いてみます」】

この間、ちょっとわからない言葉が出てきたので、そばにいた学生さんに「これってどういう意味かな」と尋ねたところ、その人が「チャッピーに聞いてみます」といいました。私はわからなかったので、「誰、それ?」という、「チャットGPT」のことなのだそうです。あとで他の人にも「チャッピー」と聞いてみたところ、みんな知っていたので、たぶん知らなかったのは私だけだったのでしょう。チャットGPTを含めて生成AIという技術が私たちの世界のあちらこちらで急速に普及しつつあることは感じていましたが、なんだか友だちみたいな呼び方までするというのは少し驚きました。

神学部のゼミでもAIを日常的に使いこなしている学生さんがたくさんいて、私の方であれこれ教えてもらうのですが、実は今、個人的に取り組んでいる仕事もそのへんのことが関わっていて、勉強したり考えたりいろいろ試行錯誤している最中です。

これまで長い間、日本のキリスト教徒の人数は人口の1パーセントというのが定番の表現でした。ところが21世紀にはいつから少子高齢化と人数の減少が進み、とくにコロナ禍以降、その傾向が強まりつつあります。一般信徒だけでなく、教会で仕事をする牧師や司祭の数も減少し、たいへん難しい問題が生まれているのです。私の専門はそういう教会の現状を研究し、実際にこうした状況にどう対処するかを考えることでもあります。牧師の減少に伴う様々な問題点の一つとして、日曜日の教会の礼拝で説教する人をどうやって確保するかという問題があります。そのためにオンラインで複数の教会をつないで礼拝する方法を提案したり、一般の信徒の方でも使える説教集(メッセージ集)を編集して各教会で使ってもらう準備など、いろいろやっているのですが、そうしたくふうのひとつとしてAIの活用も浮上してきているのです。

AI説教、AI牧師、AI教会・・・

今から2年ほど前、2023年6月に、ドイツのプロテスタント教会の大会でスクリーン上に登場した

アバター牧師がチャットGPTで作った説教を語るという実験的な礼拝が行われました。それを伝えるニュース記事の一部を読みます。

「今回の礼拝では、開始 1 時間前から長蛇の列ができるなど、高い関心が寄せられた。教会では、若い男女 2 人ずつ合計 4 人のアバターが主導し、教会に詰めかけた信者らに「親愛なる友人の皆さん、今年ドイツで開催されたプロテスタントの大会で、最初の人工知能としてここに立ち、皆さんに説教できることを光栄に思います」と単調な声で話しかけたという。」
(<https://chizaizukan.com/news/38cilt5dgPal9x7aZTOnYK/> 参照 2025 年 11 月 3 日)

今でも一部の画像を見ることはできるので、関心のある人はこのチャペルアワーの後で調べてみてください。

AI説教、AI牧師、AI礼拝・・・と、何がどこまでできるのか・できないのか、またやっていいことなのか・いけないことなのか、神学的問題、信仰的問題、倫理的問題、またさまざまな著作権や法律・規制の問題等々、いくらでもクリアしなければならない問題が積み重なっているため、簡単には結論は出ないでしょうが、遅かれ早かれ、また多かれ少なかれ、キリスト教会の中にもAIの影響が及ぶことは否定できないでしょうし、たぶんすでにそれを利用している牧師もいるはずです。

このチャペルアワーにしても、3年後にはアバターのスピーカーが皆さんに語りかけているということだって、ありえないことではありません。また大学の授業にしても、基礎的な内容を扱う大クラスなどはAIとアバターとリモートを組み合わせて、一定レベルの平準化されたもので十分だという考え方もあると思います。事実、今から5年前、コロナ禍の甚大な影響のもとにあった2020年春学期には、同志社大学でもすべての授業がオンラインで実施されるという非常事態がありました。その頃はこのチャペルアワーもオンラインで発信していました。AIとアバターとリモートを組み合わせるくらい、やろうと思えば今すぐにでもできないことはないでしょう。

「人間とは何か」～神に聞く姿

けれども、もしも、やはりチャペルアワーはここに集まって人間が話したほうがいいのかとすれば、また授業も人間同士の対面のほうがいいのかとすれば、「それはなぜなのか」ということをあらためて考えなければならないと思います。見方を変えれば、人間が語ることに、人間が会うことに、人間が集まることに何か特別な意味があるとすれば、「それはいったいなぜなのか」という問題です。そしてそれをさらに突き詰めて言えば、それは「人間とは何か」という問題に収斂していく問いでもあります。

私は、人間とはたぶん「自分はいったい何ものなのか」を問う唯一の動物ではないかと思うのですが、それは人間のもっとも人間らしい面を現わしているのでしょう。古くから、哲学をはじめさまざまな学問や芸術がこの問いに対していろいろな答えを出してきましたが、未だに決定的なものはないと思います。なぜなら人間というものはそれほどまでに不思議に満ちており、多様性を持ち、そして変化しつづけるからです。

そういうわけで、私は「人間は不断に自分を発見しつづけていこうとする生き物」だと考えているのですが、キリスト教の場合、そうした「発見」は人間が自分ひとりでするものではなく、神と共にな

すべきものだと考えます。今日、読んでもらった詩編にあるように、「人間は何ものなのでしょう」と古代の信仰者は神に向かって問います。聖書では人間は神によって創造されたとされていますから、私たち人間のことをほんとうに知っておられるのは私たちが造られた神ご自身だけなのだ、だから「人間とは何か」ということを神に問うという姿がここに描かれているのだと思います。それと同時に、「私は何ものか」という問いを、人間は孤独に自問自答すべきものではなく、神との親しい交わりの中で共に考え、人間を愛しておられる神と共に自分自身を発見すべきだと考えているのだと思うのです。

「人間とは何か」。「チャッピーに聞いてみます」ということもできるでしょうが、古代の詩人はそれを神に向かって祈りました。どちらがいいのか、自分で決めればいいことですが、少なくとも私の場合は祈るほうを取ります。

〔祈り〕